

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24510054

研究課題名(和文) 社会的文脈を重視した地域音環境マネジメントの方法

研究課題名(英文) Management of local sonic environments by focusing on social contexts

研究代表者

箕浦 一哉 (Minoura, Kazuya)

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：10331563

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、良好な音環境を保全するためのマネジメント手法について、住民が地域生活を通じて共有してきた社会的文脈を重視して考察することを目的とした。このために、欧州の騒音政策の動向と、サウンドスケープ概念の社会的側面の位置づけについて、文献による検討をおこなった。住民反応と社会的文脈の関連を検討する事例として、日本の織物産業地域および欧州の大学都市における調査を実施し、地域住民や関係者が音環境について述べる言説を分析した。また、マネジメントの過程の事例として、時報放送に関する行政の意志決定プロセス、景観保全活動における市民と行政との協働の事例を調査した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to discuss the methodology for management of local sonic environments by placing emphasis on social contexts that residents live within. Current environmental noise policies and the social aspect of soundscape concept were reviewed as basic information. People's discourses on local soundscapes in two case fields were studied in order to discuss relationships between community responses to the soundscape and the local socio-cultural contexts. In addition, policy processes were discussed through a case of a clock chime melody sounded through public announcement system, and through another case of an active collaboration between citizens and local government workers in landscape conservation.

研究分野：環境社会学

キーワード：音環境政策 サウンドスケープ マネジメント 社会的文脈 地場産業 オランダ

1. 研究開始当初の背景

従来、音環境のマネジメントは、主として騒音による生理的・心理的影響をいかに小さくするか、という観点で行われてきた。その結果、マネジメントの手法は、許容基準を定め、その範囲内に騒音曝露量を制御することが主眼とされてきた。だが過去の調査結果から、地域音環境についての住民意識がその地域固有の社会性・歴史性を背景としていることが知られている。この点に着目すれば、個別の地域の音環境のマネジメントにおいては、地域固有の音環境の価値を問題にする必要があると考えられる。

本研究に関連する研究動向として、騒音に関連する分野では欧州を中心に地域音環境マネジメントについての関心が高まっており、近年は「騒音政策」や音を風景としてとらえる「サウンドスケープ」に関するセッションが騒音に関する国際学会で設けられるようになってきている。しかし、この分野の研究の基本的な視点は騒音制御工学であり、地域社会との関係性を考慮した音環境のマネジメントの必要性はいまだ十分に認識されているとはいえない。こうした背景から、社会的文脈を重視した地域音環境マネジメントの方法を検討することを着想した。

2. 研究の目的

本研究は、良好な音環境を保全するためのマネジメント手法について、住民が地域生活を通じて共有してきた社会的文脈を重視して考察することを目的とするものである。具体的には、音環境が社会的文脈の中でどのように受容されるかについて聞き取り調査等によって収集した住民の言説から分析するとともに、行政プロセスの事例の検討等を通じて、マネジメント手法について検討した。

3. 研究の方法

(1) 音環境の社会的受容に関する事例研究

音環境を地域社会がどのように受容するかを社会的文脈との関連から分析するために、特徴的な音を持つ地域を事例として調査を実施した。地場産業地域は、産業音が一方で「騒音」として望ましくないものと認識されながら、もう一方では地域のシンボルとして捉えられる可能性があることから、社会的文脈の影響を観察するために適当であると考えられる。そこで本研究では、京都府京都市および山梨県富士吉田市の織物産業地域を事例地域とした。また、オランダ北部の地方都市フローニンゲン (Groningen) は大学都市としてのアイデンティティを有していることから、この都市の市街地での学生による騒音を地場産業地域の産業音と同様に位置づけることができる。これらの事例地域において、住民への聞き取り調査や文献資料を分析し、音環境への住民反応と社会的文脈の関連性を検討した。

(2) 音環境マネジメントのプロセスに関す

る事例調査

社会的文脈を考慮に入れた音環境マネジメントの方法を考えるために、政策過程における正当性や住民の関与が問題となる。そこで、それらの課題に関連する事例について地方自治体職員への聞き取り調査を実施した。行政の施策の正当性が判断される過程について、山梨県富士吉田市における行政防災無線での時報デザインプロジェクトを事例として検討した。また、音環境の関連領域として景観保全活動を取り上げ、市民と行政職員の協働によっておこなわれる活動事例を調査した。

(3) サウンドスケープと音環境マネジメントに関する文献調査

地域音環境マネジメントを検討するために必要と考えられる課題について文献調査を行った。特に欧州の騒音政策に関する動向について情報を収集し検討した。また、サウンドスケープ概念における社会的側面の位置づけについて検討を行った。

4. 研究成果

(1) 音環境の社会的受容に関する事例研究

織物産業地域の事例

京都府京都市および山梨県富士吉田市の織物産業地域において、地場産業のサウンドスケープに関する研究を実施した。それぞれの地域で収集した地域の音環境に関する住民の言説から、織物産業音が地域固有の社会文化的文脈のもとで理解され受容されている状況を分析した。総じて、住民の音環境への反応は単なる物理的音響への反応ではなく、地域の経済を支える産業であるという「音の意味」や、音を出す者との社会関係などを反映したものであることが知られた。また、京都市K地区においては、1960年代に小学校教諭が教育研究の一環で実施した克明な騒音レベル分布および織物産業音の観測地点分布が得られたことから、同地点における騒音レベル測定と音源調査を実施し比較を行った。その結果、産業音の減少と騒音レベルの低下が顕著に認められた。

欧州の大学都市の事例

オランダ北部の都市フローニンゲンの住民 40 名を対象とした聞き取り調査から、音環境への反応に地域の社会文化的文脈が与える影響について検討した。フローニンゲンらしい音 (Typical sounds for Groningen) として、協会の鐘、自転車、学生の音を多くの回答者が言及し、これらがシンボリックな音として受け止められていることが知られた。中心市街地における学生の騒音に対しては、否定的な回答とともに、「それほど気にならない」「大学都市らしい雰囲気」「居心地がよい」などと中立的・肯定的な回答も少なくなく、市民が比較的寛容に受け止めていることが知られた。このような音環境への反応にはフローニンゲンが大学都市としての歴

史を有している社会的文脈が寄与しているものと考えられた。

(2) 音環境マネジメントのプロセスに関する事例調査

行政防災無線の時報放送の事例

行政防災無線の時報放送に特別な意味を持った楽曲を使用した山梨県富士吉田市の事例を調査し、音環境デザインの行政プロセスについて検討した。防災無線設備を利用した時報の放送は多くの地域で行われており、地域のサウンドスケープの一定の位置を占めている。山梨県富士吉田市では2012年12月および2013年7月に、夕方の時報のメロディーをあるロックバンドの楽曲に変更する取り組みが行われた。この取り組みは市民に好意的に受け入れられたほか、遠方からチャイムを聴きに同市を訪れるファンもあった。必ずしも多くの市民が認知していない楽曲であるにも関わらず公共的に放送されることが受け入れられた理由として、楽曲をそのまま放送するのではなくメロディーのみをチャイム音で放送する形を採ったことによって音の機能的意味が変化しなかったこと、楽曲の背景が地元メディアの報道等を通じ市民に共有されていたこと、その背景から時報音の変更が地域の魅力再発見を目的としたまちおこし事業と位置づけられたことなどがあることが分かった。結果として、このチャイム音は時間を示す信号音であるだけでなく、共有された「物語」を想起させる標識音であり、かつ「地域資源」であるという多義的な存在となった。また、富士吉田市という共同体を象徴する音であると同時に、このミュージシャンのファンという共同体を象徴する音という意味を持つことになった。この事例から、鳴らされる音の適切性、音の意味の共有、実施プロセスにおける公共性への配慮が、公共空間のサウンドスケープ・デザインに必要な要素であると示唆された。

景観保全における住民参加

音環境の関連領域として景観保全活動を取り上げ、市民と行政職員の協働に関して、山梨県北杜市で活動する「八ヶ岳南麓風景街道の会」を事例とした調査を実施した。とくに協働の経験を通じて地方自治体職員がどのように認識と行動を変化させたのかに注目した。事例において、行政職員は市民との協働への参加を通じ、敵対的認識の解消からメリットの認識、主体的な貢献へと進み、業務への応用に至るというプロセスで認識と行動を変容させていた。そこには、協働への参加の結果として生じた協働への肯定的評価が参加意識を強化するという正のフィードバックループが存在していた。その評価の要因としては、目的意識に対する共感、知識・経験への尊重、行動に対する尊敬が見いだされた。また、本会の協働形態における固

定的メンバーによる継続的なコミュニケーション、対等なパートナーシップ、市民のリーダーシップといった特徴も行政職員の認識や行動の変容に影響していると考えられた。この関係性のなかで市民の考え方が行政に内部化され、業務への活用への展開が生じていた。このようにして、意欲と見識を持つ市民との固定的で継続的な関係が、行政職員の認識に影響を与え、それが協働関係の強化と景観施策の展開という効果として表れたことが知られた。

(3) サウンドスケープと音環境マネジメントに関する文献調査

欧州の騒音政策における地域社会との関係性

欧州の騒音政策に関して文献を中心に検討した。欧州の騒音政策に関しては、2002年の環境騒音についてのEU指令(2002/49/EC)に基づき、各国国内の法制度の整備が行われるとともに、技術的な検討が行われてきた。EU指令の要求事項のうち、主として関心が持たれているのは戦略的騒音マップと行動計画を用いた騒音の削減である。行動計画に関してはEU指令に市民参加についての記述があるが、市民が地域音環境マネジメントに参画する事例は現在のところあまり見られない。また、騒音削減以外には静穏地域(Quiet areas)を保全する取り組みも実施されており、欧州環境庁(EEA)は静穏地域に関する実践指針を2014年にまとめている。静穏地域のマネジメントを検討する上では社会文化的側面を検討することが有意義だと考えられる。

サウンドスケープ概念における社会性

音を風景として考える「サウンドスケープ」概念について、《環境論》《人間論》《社会論》の3つの力点を想定し、概念の広範な射程における社会的側面の位置づけを検討した。サウンドスケープ研究実践において、《環境論》《人間論》《社会論》の3つの志向性はいずれも無視しえない重要な考え方として扱われている。その中で、《社会論》の関心にもとづくサウンドスケープ研究の課題としては、騒音による社会的問題、社会に共有された音の意味づけ、音の社会的機能、音の状態と社会関係との関連、サウンドスケープの公共的価値、音に関する政策・マネジメントなどが挙げられた。《社会論》的サウンドスケープ研究は現実理解と応用・実践の両面から重要であるといえるが、そのためのツールは多く提示されているとはいえず、今後のサウンドスケープ研究において充実が望まれる分野であることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

箕浦 一哉, 道路景観保全活動における市

民との協働が地方自治体職員の認識と行動に与える効果 - 「八ヶ岳南麓風景街道の会」を事例に - , 土木学会論文集 G (環境), 査読有, Vol.70, No.6, 2014, pp.11_267-11_278, http://dx.doi.org/10.2208/jscej.70.11_267

〔学会発表〕(計5件)

Kazuya Minoura, Corné Driesprong, Karlijn Profijt, Kristin McGee, Tjeerd C. Andringa, The Influence of Socio-cultural Context on the Perception of Student Noise in the City of Groningen: A Qualitative Analysis, EuroNoise 2015, 2015.06.03, Maastricht (Netherlands).

Kazuya Minoura, Children in Nishijin: The Soundscape of Weaving Noises and the Educational Practices of an Elementary School Teacher in 1960s Kyoto, Invisible Places Sounding Cities Symposium, 2014.07.20, Viseu (Portugal).

箕浦 一哉, 「夕方5時のチャイム」の公共性: 山梨県富士吉田市の取り組みから, 日本サウンドスケープ協会 2013年度秋季研究発表会, 2013.11.16, 千葉県立中央博物館(千葉県千葉市).

Kazuya Minoura, Life with weaving noise in Fujiyoshida: A soundscape as a commons, 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons, 2013.06.07, 富士 CALM(山梨県富士吉田市).

箕浦 一哉, 3つのサウンドスケープについての試論, 日本サウンドスケープ協会 2012年度秋季研究発表会, 2012.12.22, 横浜市開港記念会館(神奈川県横浜市).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

箕浦 一哉 (MINOURA, Kazuya)

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号: 10331563